

# 技術者の卵のための英語演習とその周辺

English for Japanese Students as Future Technical Engineers

石田博樹

Hiroki Ishida

What is the best way to improve the practical English of Japanese students who are future technical engineers? How can we do our best in the training for the students? For the improvement of English usage, the usage of Japanese should be reconsidered. To make our Japanese clear is to make our English clear. Today, scientists and engineers can not survive on the international stage without the skill in English, although there exists a great gap between Japanese and English based on the difference in the culture and history. This paper describes some teaching methods in the author's class of English. Through the experience of the author's class desirable future education system of English in the school in Japan was proposed.

## [1] 研究者と英語

研究者人生の始まりを、大学院修士課程を修了し博士課程に進んだ頃とすれば、研究者生活を 30 年近く続けていることになる。自著論文のファイルをめくってみると、研究論文を日本語で書くことをやめ、全て英語に切り替えてから（その必要に迫られて）約 20 年になる。どんな学問分野にしても、国際間交流がこれだけ盛んになっている今日、学問研究を職業とする者にとっては、英語は生きるための生活必需品、即ち、英語は必携の商売道具といってよい。大学院時代の輪講、演習をも含めると、今日まで直接、間接に「英語教育」に 20 年以上関わってきた。もとより、私自身は「英語教授法」の専門教育を受けたことはなく、また、英語そのものを専攻したこともない。未だ浅学で修業中の身ではあるが、この 10 年間、高専の高学年を対象に「科学英語演習」を担当している。今日の日本では、幸か不幸か、書店には英語の学習法、表現法、上達法、作文法の類の書物が選ぶに迷うほど大量にある。テキストとして何が良いのだろうか。科学者、技術者をめざす学生たちにとっては、どのような「英語演習」が効果的なのであろうか。もし、既にそれを実践されている方がおられれば、是非ともその極意と方法論を御教示いただきたいと思う。

我が身を振り返ってみると、「英語が自由に使える」ようになるのはいつの日かと思うが、外国人研究者の論文を読み、自分で論文を書き、手紙を書

き（受取り）、依頼された論文の Review を外国の Editor に送り、時には外国人研究者と英語で Discussion を行なう、ということが日常の仕事の一部になっていると、少なくとも理工系の学問研究を職業としている限り、英語の修業からは決して逃げられないことが実感できる。書いても、話しても、いまだに英語を直されている。研究者は、もし成長途上であれば、やはり、遅くとも 20 代の末頃までには十分な英語の訓練を受けておく（その環境に身を置く）ことが必要であろう。そして、Native Speaker ではない研究者であれば、一生、英語の修業が付いてまわる。それは職業研究者の宿命といえる。自分自身の経験と日常生活から、そうした事情がよく分かる。

国際舞台では英語が共通語である、という現状では、「英語が使えない」ことは、内外の研究成果を吸収する手段を自ら失っていることであり、さらに、自分の貴重な研究成果の公表の機会を自ら失っていることである。まともな研究者であれば、それは致命的な損失を負っていることを意味することは言うまでもない。大学院時代に、「自国語で論文が書け、Presentation ができる彼等（Native Speaker）が羨ましい」とよくもらしておられた恩師の気持がよく分かる。国際学会に出席するたびに、国籍を異にする研究者達が共に英語圏の Native Speaker であるために（時には英語圏ではない研究者でも）、自由に意見交換をしているのを見るとつくづく羨ま

しさを覚え、自分が日本人に生まれたことを残念に思うことさえある。

## [2] 英語の学習の前に

「優雅な表現」、「格調高い文章」、「文学的情緒豊かな描写」は、少なくとも、科学技術の学術論文（日本語、外国語を問わず）には、全く不要である。このことに誰も異論がないであろう。科学者、技術者にとって、英語は意志伝達と情報交換のあくまでも手段（重要な）に過ぎない。即ち、英語の使用にあたっては「正確に伝わり、正確に理解できる」ことが第一の条件でなければならない。しかし、そのための英語の訓練を始める前に、私達自身、日本語であれば（日本人であるから）「正確に伝え、正確に理解できる」と本当に言えるであろうか。日常生活の中に出まわっている文書、雑誌、学内に配布される文書、国会答弁、等を見れば答えは明らかであろう。

例えば、英語文を作成したいときに、Word Processor を使用し、後に Spell Check や Grammar Check のソフトウェアを発動すれば O.K. とは全く言えない。即ち、作文をしようとする者の主張が明確であり、Logic が clear でなければ、到底、まともな英語文は完成しない。日本語と英語は、全く異質な別世界の言語であることに留意しなければならない。日本人にとって「英語の感覚が分かる」段階に至るには、相当な修業（年月も）が必要である[2,6]。

今日、翻訳ソフトと呼ばれるものがある。しかし、簡単な日常会話程度の文章には多少有効ではあっても、重文、複文を含む、まともな英語文章や日本語文章の相互翻訳には全く使えないものが大半である。使い物になる翻訳ソフトの開発には、まだ10年程度は必要であろう。また、Word Processor のソフトウェアの開発において最も難しいのは、おそらく Logic Check であろう。

英語論文の Check を依頼される度に、いつも思うことであるが、Spell や Grammar の Error は「直せる間違い」であり、Logical Confusion は「直せない間違い」である。書いた御本人に真意を尋ねなければならない。「科学英語演習」が、その目的の原点に立ち返ってみれば、まず、日本語の見直しと修正の特訓により開始しなければならない所

以である。また、教える側にとっても、それは（同じ日本人であるために）大変に勉強になるものである。

次の「日本語文」を英語文に直すとしよう。

「恒例の親睦会主催の秋季の運動会が、下記の日程で実施されますので、職員各位におかれましては、御多忙中とは思いますが、多数の参加、協力をお願いいたします。なお、大会役員の方は、各課の職員の出席について御配慮、および御指導をお願いいたします」

まず、「恒例の」はどこにかかるか。主催が秋季か。「--- におかれましては、--- と思いますが、--- をお願いいたします。」をどう扱い、どう英訳するか。「--- の方は、--- の出席について御配慮、および御指導をお願いいたします」をどう扱い、どう表現するか。実に疲れる作業ではある。日常生活には、このような類の文書は珍しくなく、通常の日本人であれば、これだけで、大体その意味が分かる。そのままでは、英語ではすんなりとは表現できない文脈の文章でも、日本人には抵抗なくその意味が理解できることが多い。しかし、実は、それこそが、まさに日本人が英語を学ぶ際の大きな障壁であることに注意しなければならない。

次は和文英訳の、ある大学入試問題である。

「さまざまな問題に直面するとき、それをできるだけ早く解決したいと思うのは当然である。しかし問題というものの性質から言って、それが容易に解決しがたいものであればあるほど、重要性を増すものだ」

一読して、この文章の奇妙さに気付くであろう。「しかし」の前と後とが論理的につながらない不正な「日本語」である。「重要性を増すものだ」が Logic を混乱させているのである。「--から言って、重要な問題であればあるほど容易には解決しがたいものだ」とでもすべきであろう。この問題文の英訳そのものは易しい。しかし、Native Speaker であれば、この奇妙な Logic に首をかしげることであろう。こうした入試問題文を時々見かけるが（受験生もさぞ面食らうことであろう）、それらは出題者の日本語能力はもとより、英語の能力にも疑念を抱かせる。

「日本語はあいまいである」、「日本語は論理的に明快ではない」といった事大主義的な発言は厳

に慎まなければならない。単に使用法を誤っているに過ぎないためである。「論旨明快な日本語は英語に直しやすい」、「明快な日本語文が書ける人は、英語文の上達が早い」という事実は、それを良く示している。即ち、「使う日本語が論旨明快でない人は英語が学習できない」と言える。それは英語のみならず、どんな外国語の学習についても言えることであろう。また、もちろん、「日本語を論旨明快に使えない人は、学術論文が書けない」ことは、言うまでもない[4,6]。

以下の文章はどうであろうか。

「生物環境工学科は開学以来続いた2学科体制から、学科改組により生物工学科と環境工学科に分離してそれぞれ1学科となり、来年度はその完成年度となる。」

「土砂の水力輸送は、干拓地域の新しい工事方法として、実用化が期待され、関連する機械の開発が求められている。」

「単位の認定は、学業成績の評定がA,B,Cに評価された授業科目については、当該科目を修得したものと単位を認定する」

日本語の訓練の不足、あるいは、Logical thinkingの未熟さを示す、これらは典型例といえよう。一読して、直感的にこうした文章の不備が感知できなければならない。間違ふことは許される。だが、「間違いに気付かない」ことは、研究者であれば許されないことである。まともな英語文(そして日本語文も)が書けるためには、学術論文が書けるためには、こうした文章の不備を瞬時に感知し、修正ができなければならない[4]。なお、以上のことから「英語は論理的な言語である」とするのは早計である。英語はImage Languageだ、と主張するNative Speakerは多い。アメリカの理工学系大学院にはNative Speakerを対象としたEnglish Writingの授業がある。Multiracialの国ゆえか、言語の使用にあたっては「正確に伝え、正確に理解できる」ことが強く求められており、そのための数多くのテキストがある[1,3,5,8,9]。一方、この日本に、国語(あるいは日本語の演習)をカリキュラムに用意している理工学系大学院があるであろうか。日本語の見直しの演習とペアを組むことのない「科学英語演習」など、私には、到底、有効な授業とは思えない。

意志伝達と情報交換の重要な手段である日本語の学習、訓練の機会、大半の日本人にとっては高校を卒業するともはや存在しない。また、論旨の不明瞭な、主語述語関係の混乱した、修飾語と被修飾語の関係が不明瞭な文章や発言が日常生活のなかに普通に存在している。しかし、日本ではそれらは玉虫色と呼ばれるのみで、とくに指弾されない。こうした日本語環境の実状は、日本人にとって日本語の正確な使用の習慣とその必要性や意欲をも失わせ、かつ文章や発言における不明瞭さと無責任さに対する鈍感さを醸成していると言えよう。そして、結局は、それが日本人が外国語を学ぶ際の重大な障害をもたらしているといつてよい。

### [3] 英語演習の実際

ともあれ、このような日本に生れ、育った20才前後の科学技術者の卵たちを対象として「科学英語演習」を担当することになった。日本語の点検から始めたのは言うまでもない。一方、驚き、がっかりしたことは、学生たちの英和、和英辞典が共に殆ど未使用に近いほど新しいことである。高専という学校の故か、学生に聞いてみると、まともに(修得のために)英語の学習に取り組んだ経験のある者がいない。もちろん、高校1,2年程度の簡単な英文でさえ訳せない。また、書けない。文法の基礎知識に至っては中学3年程度で停止したままである。しかし、それでも高専入学以来いままで適当な合格点ももらって来ている。このような学生が40名以上もいるクラスでも英語の試験成績が平均75点にもなっている。一体、どんな試験と成績判定基準なのであるか。試験の出来具合が2,3割程度でも、常に合格点を与える「優しい先生」もおられるらしい。加えて、英語の単位が不合格でも卒業や進級には直接の支障がない。当然の結果として、高専の学生の英語の力不足は呆れるばかりであり、4,5年生になっても大学進学を目指す通常の高校生には遠く及ばない。大学へ編入学した高専卒業者は、普通高校からの入学者との英語の力の圧倒的な差を改めて見せつけられるようだ。大学の教員も高専からの編入学者の英語の力不足を嘆いている。

しかし、ともかく、科学技術者の卵である約20名の学生(金や銀の卵が混じっていると信じたい)を相手に英語を教えなくてはならない。当初、Word

Processor のディスクを人数分用意し、計算機センターで作文の演習を行なうことを予定していたが、すぐにそれは断念した。到底、それができる段階にはない。

もとより、日本人であれば誰でも、話す英語の中にどうしても Japanese accent が含まれるのは避けられない。だが、それは当然のことであり、必ずしも直す必要がないように思う。テレビを見ていると良く分かるが、世界中で話されている英語は、local accent だらけだ。必ず当人の native accent が含まれている。特に、インド、中近東、スペイン語圏の国々の人の話す英語は、遠くで聞いていても、その特徴が良く分かる。したがって、私達日本人は、自分の Japanese accent を気にする必要はないと言えよう。私自身は、英語の聞き取りも、どちらかと言えば苦手である。英語による研究者どうしの議論や日常生活では、私は通常不自由を感じない。しかし、早口で言われると、いつもお手上げである。CNN のニュースを見ている時にも、リポーターが現場の様子を早口で話し始めると、たちまち聞き取れなくなる。よって、Conversation や Listening の訓練は、私の授業の力量外のこととし、LL 教室などにおける英語授業に譲ることにした。

私は約 15 回の授業を 3 期に分けている。第 1 期は日本語の特訓である。まず、日常周辺にある日本語を見直し、「玉虫色」の文章や表現を厳しく点検し排除する訓練と、論旨明快な日本語文に書き直す訓練である。第 2 期は英語文の正確な読解の特訓である。まず、科学分野の半ペ - ジ程度の英語文を声を出して一気に読み通す。そして、意味をつかみ日本語に翻訳する特訓である。第 3 期は、受講者が日本語で書いた自分の読書感想文を自力で英語文に翻訳する訓練である。もちろん、元の日本語原稿の見直しが必要である。この英語による文章の作成作業は、実はかなりの苦行のようだ。今までに英語の文章を書く訓練を受けたことのない受講者にとって、それは当然と言えよう。授業評価アンケートによれば、受講した学生にとって、「高専に入学して以来、初めて体験した日本語と英語の修行であった」とのことである。

教える側としても、毎回のように汗をかき、疲れたことは言うまでもない。大学へ入学してまも

ない頃、ロシア語の授業中に、先生がしばしば汗を拭い、休憩を取り、「入門時の語学の授業は肉体労働です」と苦笑されていた姿がしきりに思い出され、今の我が身の姿を振り返って苦笑してしまった。教師が一人で担当する外国語の演習授業では、受講者の数は最大でも 20 名程度が限界であろう。

英語の文法については（その教授法にも）、あらためて考えさせられることが多い。英語が必須な日常生活に身を置き、また英語を教えてきて、しばしば邪魔になるのは、中学、高校の頃にうさく叩き込まれた「関係代名詞の制限用法と非制限用法」の原則である。もちろんこの原則自体は、英語の文章にとって重要な文法であるが、英語文を日本語に訳そうとすると、制限用法の部分に出会うと、常に、「従属節を訳した後にその対象としての先行詞を訳す」という習慣から、通常の日本人はどうしても抜け切れないのである。そうした原則通りに、長い Sentence を日本語に訳そうとすると、どうしても冗長な、主語に長々しい修飾語句のかかった日本語文が出来上がってしまう。そして、結局は、肝心な文章全体の趣旨と論旨がぼやけてしまうのが常となり、当然の結果として、長い Sentence ほど、一見ただけで敬遠されることになる。

では、関係代名詞の用法をどう扱ったら良いか。私自身は、「和訳するときは、常に非制限用法として日本語を組み立てる」ことを強く推奨している。そのほうがずっと自然な日本語が組み立て易く、読む側、聞く側にも親切となるためである。特に、長文になるほど、それは著しい。また、それがわかれば「長文読解」もなんら苦にならない。後は、御本人の日本語能力に依ることになる。英語の翻訳をてがけた人であれば、どなたも痛感しておられることと思うが、平易な日本語に翻訳し、原文の真意を訳出しようとするときには、実は、長い文章よりも短い文章の方に格段に気を使わせるものである。後に、原稿を読み返してみても、冷や汗をかきつつ訂正した経験をお持ちの方は私だけではあるまい。

なお、こうした秘訣は、日本語とは語順の違う、別世界の言語である英語での論議の中に身を置いた時には、特に必須である。言葉というものが、発せられた順番に相手に伝わっていくものであることを考えてみれば、それは当然といえよう。実際、

そうでなければ同時通訳は絶対に不可能である。

アメリカのワシントンにあるリンカーン記念大聖堂の中に第 16 代大統領のリンカーンの石像がある。その背後の壁にはこう記されている。IN THIS TEMPLE AS IN THE HEARTS OF THE PEOPLE FOR WHOM HE SAVED THE UNION THE MEMORY OF ABRAHAM LINCOLN IS ENSHRINED FOREVER 読んで直ちに誰の胸にも落ちる簡潔な文章である。しかし、これを日本語に訳そうとすると、誰もが少し考えてしまうであろう。

Native Speaker 自身は、もちろん、「制限用法と非制限用法」など日常いちいち気にはしていない。Speech はどんどん流れていく。じっと聞いている日本人のことなどおかまいなしだ。しかし、実際の講演、討論のなかで、制限用法か非制限用法かの判別は、注意して聞いていると（訓練を積むと）、日本人であっても充分感知出来るものである。こうしてみると、「関係代名詞の制限用法と非制限用法」は、そう厳格には指導しなくてもよいのではないか、と思う。ただし、英語が必携の商売道具である研究者の場合、もちろん、その文法自体は熟知し、使いこなせなければならない。

#### [4] 英語の辞書

言語は生きものである。昨今出回っている「電子辞書」と呼ばれるものは、英語に関する限り、用例や例文を殆ど省略してしまっているために、通常は学習の役に立たない（旅行の携帯用としての使い道はある）。そのため、私は、受講者の学生には、普通の辞書を購入すること、それを頻繁に使い、自分の座右の書とすることを推奨している。

手元の英和辞典では「本当ですか？」を Is that true? としている。しかし、それが文章としては成り立っても（それは裁判における証人尋問か、大学院生の持ってきた測定データをいぶかしそうに問い質す指導教授を連想させる）、Native Speaker であれば、日常生活では、まず決して言わない。Really? で充分である。かつて有名であったある英和辞典では、giga- を 100 万の、としている。これは不注意な単純ミスといえる。Hispanic という言葉は、「スペイン語を母国語とするアメリカ人」を意味する名詞であり、Hispano と同義語といえよう。

今日では、「スペインの」だの「ラテンアメリカの」といった形容詞として使われることは、極めて少ないようだ。outreach という言葉は、広げる、広がる、手を伸ばす、越える、といった意味の動詞としての用法は、もはや、ほとんど消滅している。今日では、福祉（奉仕）活動、出前授業、学外活動、等を意味する名詞である。

「全面改訂版」と銘打って、毎年春の新学期の季節に宣伝され、売り出される多くの英和辞典は、その宣伝の割には、こうした英語の変化に追随していない。最近、10 種類以上の「改訂版英和辞典」を調べてみたが、極く少数を除いて、一体どこが「全面改訂」なのかと、私は首をかしげてしまった。

その原因を考えるために、手元にある Webster, Oxford, Randomhouse, American Heritage 等の英語辞典、また英語用法辞典などにあたってみると、実は、あることに気がつく。英語を専門とするある大学教授によれば、「英和辞典とは、所詮、定義辞典ではなく訳語辞典である」とのこと。元になった英語の辞典に古い意味内容や間違いが含まれていると、それを元にした英和辞典にも同じ内容が受け継がれることになる。英語学の高名な名誉教授の名前を「主幹」、「校閲」、「監修」として前面に出し、「全面改訂版」と銘打ち、カタカナ文字の名前を付けた、2 色刷りの見栄えの良い、有名な辞書出版社の発行による英和辞典であっても、簡単にはとても信用できない。

高校時代買った著名な和英辞典（有名な辞書出版社の発行である）は「材質」を the quality of wood としている。偶然に見つけて驚き、同時に「材」を wood とした執筆者が気の毒に思えてきた。考えるまでもなく、この wood は material でなければならない。ところが、今も発売されているその改訂版でも、全く訂正されていない。少し調べてみると、その「和英辞典」は、もとになっている「新和英大辞典」の単なる縮刷抜粋版であり、そのために、同じ間違いを引き継いでいることがわかる。今日のある最新版の和英辞典では「適宜」を freely としている。確かに「適宜」には at one's discretion の意味もあるが、一般的には suitably, properly, appropriately 等が妥当であろう。

英語辞典のこうした実状ゆえに、英和辞典や和英辞典の使用に当たっては注意が必要である。私自

身は、日常、手元に常に数種類の英和、英英、和英の辞書を置き、参照している。その言語の専門家とはいえ、人間であり、しかも日本人である著者が執筆、編集する以上、辞書にも当然間違いは含まれよう。大切なことは、「言語は生きものである」という前提のもとに、数年ごとに差替えや改訂をする出版社としての責任感と、それをやっても揺るがない「自社製品についての自信」であろう。また、それは当の執筆者と世の利用者に対する礼儀でもある。

### [ 5 ] 英語の教育現場と教師

スラブ語の大家である千野栄一先生は、「文法は作る側の立場にたつて見ると楽しくなる」と言っておられる。高校時代に、単語の記憶の苦勞よりも、文法偏重の授業と試験により(減点された経験が多くて)英語嫌いになった人は多いはずである。日本人が日本語を間違えるのと同じく、Native Speakerも英語を間違える。しかし、意志伝達が不調となる程の文法ミスはありえない。日本人としては、文法の知識の習得は(少なくとも英語に関する限り)必要最小限とし、むしろ「語彙を増やし、論旨明快な文脈で書き、話す」といった訓練に重きを置くべきであろう。文法の知識は、そのなかで自ら身に付けてくる。英語圏の国に住んでいると、それを痛感する。残念ながら、普通の日本人にとって、現在の日本では、まともな英語修業の環境に身を置ける機会が極めて少ない。英語は、とにかく、書いて、聞いて、話すこと、かつ、頻繁にNative Speakerに直していただくことが大切である。なお、それはどんな外国語についても言えることであろう。

昨今、学校教育の現場におけるCommunicative Englishの重要性が強調されている。そのこと自体はとても良いことだ。だが、それに加えて、あえて私は、技術者の卵である受講者には、日本語でも英語でも「語彙を増やし、論旨明快な文脈で書き、話す」訓練の重要性をいつも強調している。インターネットの時代である現在、情報と意思を国内外へ「文章により正確に伝える」ことが求められているためである[7]。

今日、「国際化時代」であるとして、中学、高

校の教育課程に英語の授業時間数を増やす動きがある。加えて、Communicative Englishの訓練が重要とされる昨今の著しい社会的気運の中で、学校教育現場の英語教師にも「英語を使える力」を求める声が一段と高まっている。しかし、こうした動きには、実はいくつかの重大な矛盾がある。

大学入試の英語の試験はこのままで良いのか。全国の大学入試の英語の試験を、すべてTOEFLやTOEICに切り替えなくて良いのか。英語教師によりCommunicative Englishの訓練を受けて来た高校生が英語の大学入試問題を解けなかったらどうするのか。英語教師自身が置かれている職場の環境の改善(英語修業のための)をどうするのか。

これらについての建設的な打開策の論議を社会的に並行させるのでなければ、学校現場の英語教師にCommunicative Englishの能力向上を要求し、せき立てるだけでは、単に、教師を困らせるだけの、非建設的な片手落ちの鼓舞でしかない。

英語教員の資格にTOEFLやTOEICの得点基準を求めること自体は誰もが納得できよう。ただし、それならば、英語の教師を目指す学生に対する、大学における英語教育の内容を大変革する必要がある。もちろん、それを教える大学の英語教員の資格には、より高いTOEFLやTOEICの得点基準が求められる。

この日本では、大学で英語を3、4年専攻し(必ずしもCommunicative Englishの訓練を受けてきたとは言えない)、意欲をもって英語教師となっても、日常的に英語の(日本語も)訓練を受けられる場、英語の修行が出来る場と機会が保障されていないのが学校教育現場の実状である。実際、教師が自分のCommunicative Englishの力を高めるべく英語国での長期研修を申請した場合でも、それが快く許可されたためしがない。通常、現場の英語教師の間では、互いの英語を検討し磨き合うことも、全くといえるほど無いようだ。加えて、せっかく来ていただいたNative Speakerを、単に「英語授業の補助員」のままに据え置いているという日本の学校教育現場に、果たして「国際化」の波は来るであろうか。Communicative Englishが根付くであろうか。英語教師の置かれているこうした不利な環境は、英語教師自身の個人的努力のみでは打開できない問題である。

英語教師の資格取得を目指す大学生に、あるいは、現場の全ての英語教師に、国費により、最低1年間の英語国での語学研修を義務付けることぐらいの予算(国家予算全体の中でのその割合は極めて小さいはずだ)を、なぜ設定しないのであろうか。それによって日本の学校教育現場に Communicative English が根付くとすれば、随分安いものであろう。これらの意見は、おそらく私だけでなく、日本における英語教育の改善を切望している、教育界や民間企業の全ての方々にも共通する声であろう。

果たして、2002年7月、ようやく、文部科学省は「英語を使える日本人の育成の戦略」を発表した。それは3本柱からなる。即ち、1. 英語教員の研修制度の導入、2. 入試における英語の改革、3. 英語授業の補助員(ALT)の有効活用、である。以前に比べれば、かなりの進展がこの中に見える。その実施には相当な困難も予想できる。だが、やはり、戦略のスケールがまだまだ小さいように思える。

日本の中学、高校の6万人の英語教師の全てに「英語を使える能力」を求めるにすれば、5カ年計画とはいえ、研修の人数と期間が余りにも貧弱である。「青少年に英語を使える力を求める」英語入試を確立したいのであれば、全ての高校入試や大学入試の英語をTOEFLやTOEICなどに切り替えるべきだ。中学、高校の教育現場に Communicative English を定着させたいのであれば、1万人前後の「英語授業の補助員」を正規の英語教員にしなければならぬ。

## [6] 教師の影

先の千野栄一先生は、外国語習得の三大条件は、良い教科書、良い先生、良い辞書、であると、また、外国語講座の教師の最も貴重な資質は、習う人をやめさせない魅力ある授業ができること、としている。

高校時代に私が出会って来た英語教師の方々、皆それぞれが個性的な名物先生であった(英語の巧拙とは全く無関係である)。1年の時のK先生は、教科書(三省堂の Junior Crown であった)の「全文暗記」を私達に命じた。毎回の授業の始めに、生徒を指名して起立させ、前回の授業でやった部分を暗唱させた。間違うと、次の人が暗唱し終わるまでそのまま立っていないとではならぬので、私達は、

授業の前日には、自宅で一生懸命に教科書を暗記した。後になって、実は、こうした「文章丸暗記法」が、英語の学習法として、極めて有効な手段であることを知った。それぞれの先生方から授かった英語の深遠な印象は、今日でも英語に対する私の意欲の基盤をなしている(その割にはなぜか、当時の私の英語の成績は平凡なものであった)。

大学2年の時に出会った英語の非常勤講師のM先生は、活気あふれる授業により人気が高かった。大学1年の時に、全く活気のない退屈な英語の授業をしていた老教授からひどい成績をもらった私は、M先生の授業により、英語への意欲を盛り返すことが出来た。後に、M先生がラジオ講座の人気講師にもなっていることを知り、私は深く納得した。

大学時代のロシア語の先生方も魅力ある方々であった。後に、そのうちの御一人はNHKのロシア語講座も担当されていたことを知った。大学院の頃に出会ったロシア語のS先生は、日本語の達者な声のはっきりした魅力あるロシア人であった。日本経済史を専門とされ、ユ・モアあふれる授業のなかで(しかし、宿題を忘れていくと大変に怖かったようだ)、時折、源氏物語や万葉集を論じられ、また、受講者の日本語を直しては教室を沸かせた。残念ながら、日常生活で使わなくなって以来、今はロシア語には御無沙汰しているが、これらの印象は今日でも私をロシア語の魅力から離さない。

普通の日本人研究者と同様、私も中学校入学以来ずっと英語とつき合って来ているが(このまま、研究から Retire しない限り、執拗につき合わされることであろう)、語彙の正確な使用法ひとつとっても、未だに自信がない。しかし、例えば、perhaps, probably, possibly, likely, maybe の区別には習熟できるであろうが、remarkable, noticeable, prominent, conspicuous, outstanding を正確に使い分けられる日本人がいるであろうか。辞書にも、これらの使い分けの明快な説明がない。もし、できる方がおられれば、是非とも、御教えを乞いたいと思う。そして、どのようにしてその知識を習得されたか、御教示願いたいと思う。日本人であることの初期条件は重い。普通の日本人にとって、「英語の感覚」を理解する道は遠い。それは、ひとえに、国の歴史と文化の違い、そして、それをもたらしてきた壮大な世界史の流れによる、と思えてならない[2,6,7]。

## [ 7 ] 結び

外国語の学習は、その国の文化の学習である。打ち込むほどに、その言語の歴史の探究にまで進まざるをえないのが通例である。その際に日本人にとって何が大きな障壁であるかについて、その一端を述べてきた。また、現場の英語教育の改善策の試案を述べてきた。果たして、日本人にとって「英語の感覚を理解する」ことができるのであろうか。日本人の中に Communicative English が根付くのであろうか。それらの限界を認めつつも、試行錯誤を繰り返しつつも、教育現場にいる多くの研究者たちと同様、私も、若い学生を対象とした「科学英語演習」に、これからも苦心し続けることであろう。自ら手塩にかけた、かけがえのない大切な技術者の卵たちに、インターネットの普及したグローバル化時代の中で生きる上での必携の商売道具を与えずして、そして、かつての恩師の方々が自分に伝えてくれた英語の素敵な魅力を、今日、自分が彼らに伝えずして、彼らを世に送り出すことはしたくない。本稿は、以前の拙稿「科学者の卵のための英語演習」に大幅に加筆したものである。この一文が英語教育に携わる人々にとって、多少とも参考になれば幸いである。

## 参考資料

- (1) 「Why Not Say It Clearly」 L. S. King; Little, Brown and Company, Boston (1978)
- (2) 「日本人の英語」(正、続)マク・ヒ・タセ、岩波新書 (1988, 1990)
- (3) 「The Elements of Style」3rd ed., Strunk and White; Macmillan Publishing Co., Inc. (1979)
- (4) 「科学英語論文を書く前に」桜井邦朋、朝倉書店 (1989)
- (5) 「The Fine Art of Technical Writing」 C.R. Perry; Blue Heron Publishing, Inc. (1991)
- (6) 「日本語が見えると英語も見える」荒木博之、中公新書 (1994)
- (7) 「日本人はなぜ英語ができないか」 鈴木孝夫、岩波新書 (1999)
- (8) 「On Writing Well」 W. Zinsser; Harper Perennial (1998)
- (9) 「The Art of Readable Writing」 R. Flesch; Macmillan